



ナグプール 滞在支援隊

第 1 次

古川和也さん (12/24 ~ 1/22)

姫野智久さん (12/24 ~ 2/9)



龍族

नागा लोक

第 6 号

南天会
平成 28 年
4 月 14 日



昨年末よりナグプールに人材を派遣して、佐々井上人の食事や身の回りのお世話をしていただいております。第 1 次支援隊として、古川和也さん、姫野智久さん 2 名がインド入りしてくれました。南天会として、往復の旅費と保険代を支援いたしました。滞在支援カンパをいただいた方には、あたたかいご支援感謝いたします (詳しい内容は会計報告をご覧ください)。

毎朝和食を中心に食事のお世話をして、佐々井上人の体調も安定しています。またインターネット環境が整い、日本との連絡もスムーズになりました。

現在第 2 次支援隊の手塚直人さんが滞在中です (2/25 ~ 4/23 予定)。その後の支援隊についても数名の方

から応募いただいておりますが、継続していきたくと思いますので、ご協力いただける人は是非ご連絡ください。

「佐々井秀嶺資料室」フェイスブック (<https://www.facebook.com/sasai.siryoun>) では現地の様子などを定期的にレポートしていただいております。

「支援隊感想」

今回、佐々井さんのサポートで行ってきました姫野です！

海外経験が全く無い状態で行くのは家族や友達からも心配や反対を受けましたが、世界に出ること・そして佐々井さんに会うことで何か変わるんじゃないかと思ひ参加させていただきました。

初日から大慌てでした。ニューデリーからナグプールへの乗り換えが 1 時間しかなく、数十キロの旅行かばんを持って急いで移動、無事到着したとおもいきや、宿泊したホテルではヒューズが飛び、慣れない英語でスタッフに伝える等、先行きが不安でした。

翌日、佐々井さんと初対面しました。最初の印象は「怖い」でした。というのも、インド人と話す時の声圧が凄いのです。佐々井さんの迫力にビビってしまいました。龍樹菩薩寺でも 80 歳を超えているとは思えない大きな声で多くのインド人に演説していました。

今回は佐々井さんのために日本料理を作りに行くのが目的の一つなので、日本の調味料を持って行き作らせていただきました。野菜や肉はインドの市場で購入するのですが、慣れない英語を駆使して買い物をしましたが何を言ってるのか分からぬ一人の支援隊の古川君に助けを求めた事が多かったです (笑)。

沢山のレシピを考えて作りましたが、毎日のお味噌汁 (鶏肉入り) は特に喜ばれました。(あと羊羹と餅が好物でした。)

インドでの生活も最初は大変でした。まずお風呂がないこと。シャワーはあるがお湯が出るのに数分待たないと出ない。トイレに紙がない。ミネラルウォーター以外の水を口に入れてはいけない。こうやって思ひ出すと日本の基準と比べると生活しにくい感じですが、人間って慣れるんですね。一週間もしないうちにそれが当たり前だと思ひながら生活します (笑)。

インドラ寺での生活に関してはお湯が出る環境がなかったのでコイルヒーターという水を温めてくれる機械を手に入れ、毎日バケツ一杯のお湯で全身を洗う生活でした。今思うと凄かったな・・・。

佐々井さんとの生活はとても楽しかったです。食事中はインドでの生活の話などをしてくれたり、若いころの家出の話を聞かせてくれました。

その中で佐々井さんがよく使われる言葉「春の海 終日のたりかな」この言葉が今でも私の胸の中に残っています。佐々井さんもインドでうまくいかず焦るときは天に向ってコレを叫ぶそうです。それを言うとき心ななかにこの言葉が叫んで落ち着かせています。



二人きりで話せる最後の日には、「姫野君はとても成長した、最初はひよろつとして頼りない感じだったけど、今は目に力がありとても凛々しくなった」と褒めていただき、インドに来てよかったと思つてます。

私は佐々井さんに会うことができとても感謝しております。そして、佐々井さんをサポートする事で私自身も成長するきっかけをいただきました。

それも南天会の御支援がなければできなかったことだと思つてます。本当にありがとうございます。

これからも佐々井秀嶺さんと南天会の活躍を祈っております。

アンベードカル博士 生誕 125 周年 改宗 60 周年



本年 2016 年は、インド仏教復興の大導師 B・R・アンベードカル博士の生誕 125 周年、そして 1956 年のナグプールにおける集団改宗から 60 周年という記念の年に当たります。

佐々井上人は昨年アンベードカル記念協会 (Dr. Babasaheb Ambedkar Smarak Samiti) の会長に就任し、今年の様々な行事の中心役として多忙な日々を送られています。

今年 1 月から来年の 4 月まで、毎月 28 日、29 日にインド各地のアンベードカル研究者、活動家 (アンベードカライト)、お坊さんをナグ

プールに招へいして、アンベードカル博士を国際的にアピールするための検討会が開催され、佐々井上人はその座長を勤めます。

4 月 14 日はアンベードカル博士の誕生日で、アンベードカル・ジャヤンティ (生誕祭) が各地で開催されます。ナグプールでは、前日夜の市中行進、当日のデイクシャ・ブーミ (改宗広場) での記念式典に人々が集結し、125 周年の今年は盛大に行われる予定です。今年の改宗記念式典 (Dharm Chakra Pravartan Din) は、2006 年の改宗 50

周年黄金祭から 10 年の 60 周年記念大会で、10 月 11 日開催予定となっています。1956 年 10 月 14 日は、アショーカ王法の勝利の日ということで、仏暦に従って毎年開催日は前後します。この日を中心に一週間

にわたってナグプールでは改宗式などの様々な行事が開催されます。10 日には国際仏教徒大会、前夜祭市中行進、当日 11 日に佐々井上人を導師として三帰五戒 22 の誓いの全体唱和が行われ、期間中 100 万人の仏教徒がナグプールに集結します。南天会では、この日に合わせて団体旅行を企画しております。詳しくは同封のパンフレットをご覧ください。この機会に是非ナグプールへ参りましょう。

「闘う」仏教徒

高山龍智

2016 年は、後世の仏教史に特筆される年となるだろう。

人間解放の父…アンベードカル博士の生誕 125 年にして、仏教復興宣言 60 年の記念すべき年なのである。これに先立つ昨年、わが国の高野山上にアンベードカル博士像が建立されたことは…些か政治的ゴタゴタがあったとはいえ…まさに仏祖の冥祐と云うべきであらう。

日本でアンベードカル博士の存在が一般向



ナグプールの仏教青年団事務所で気合いを込める佐々井秀嶺師



ロヒート氏の自死で蜂起した現代インド仏教徒の学生たちとアンベードカル博士像



高野山大学に建てられた日本初のアンベードカル博士像

けに紹介される大きなきっかけとなったのは、故山際素男先生と佐々井秀嶺師の出会いだった。1981年、インド取材中の故先生は在印邦人から「もう15年も不可触民と暮らしている日本人僧侶がいる」と聞き、駆り立てられるようにして三角大陸のご真ん中、ナグプール市を訪ねた。そこで出会ったのは〈異相〉の日本僧・佐々井秀嶺師。「この人には何か(憑いて)いる」と直感した山際先生の問いに、ためらいながらも語り始めた佐々井師の言葉は、まさに空前絶後の物語であった。そして、師の心を驚掴みにしインドの大地に繋ぎ止めたアンベードカル博士の仏教復興運動……。すべては、このふたりの日本人の邂逅から始まった。爾来、佐々井師渡印からおよそ半世紀を経て、ついに日印公式のアンベードカル博士像が建立されたのである。

ド市において、被抑圧階級、いわゆる「不可触民」の大学生ロヒート・ヴェムラ氏(26才)が、カースト差別によって自殺に追い込まれた。彼の遺書にはこう記されていた。
[For one last time, Jai Bheem] (最期の時です、アンベードカル博士に勝利あれ)
…念のためヒンドゥー教義の原則では、被抑圧階級は輪廻転生できない。虫のように湧いて来る存在とされるからだ。それを踏まえた上で彼の記した「one」を読んでほしい…。
あまりにも悲しい死の衝撃はインド各地を揺るがせ、首都ニューデリーや商業都市ムンバイで学生らを中心に抗議運動が巻き起こった。

しかし寛容とは、多数派強者の自制をこそ云うのであって、少数派弱者に適応を強いることではない。いまインドでは、仏教徒やイスラム教徒、キリスト教徒など社会的マイノリティの主張に対し、圧倒的多数派のヒンドゥー教徒が「Intolerance (不寛容)」と批判している。和を乱すな、大勢がそう言っているのだから、と。ロヒート氏を自死へと追いやったのは、まさにこの「寛容」という名の順応強制であった。どこか我が国の空気に通じているように思うのは私だけだろうか。

現在、日本在住のインド仏教徒は、約50世帯を越える。彼らは、生活者として日本社会の中で文化や言語の違いに悪戦苦闘しながら、ブッダとアンベードカル博士、そしてササイ・ジの教えを心の支えに生きている。

仏教の故国インドでマイノリティだった彼らは、仏

教国と思つて移り住んだ日本が〈宗派国〉だったこと、そして日本でも相変わらず自分たちが少数派であることについて、どのように感じているのだろうか。

「一番よくわからないのは、なんでこんなに小さく分かれてるんでしょうか、シューハ。不思議ですね。ブツダの教えはとてもシンプルで、すごくハッキリしてるものだと思うんですよ、僕は」

私が師父佐々井秀嶺から教えられ、固く命じられたことの第一は、「インド仏教徒を敬え」だった。「日本の坊さんの中には一般の信者を〈在家さん〉などと呼んで僧侶より格下のように言う人もいるがな、それじゃヒンドゥー教のブラーマン（※注…波羅門。カースト最高位の世襲の聖職者）と変わらんじゃないか。ブツダはそれこそ在家出身だ。つまりな、ブツダからお預かりしてるのが、仏教徒なんだよ」

2016 年を後世の仏教史に特筆される年に出来るかどうか、それは今後の日本仏教の存続に関わることもあるだろう。

（高山師ブログ『てやん Day!』より転載）



高山龍智師

龍樹と日本仏教諸派の関係

志賀 浄邦（京都産業大学・准教授）

1. ナーガールジュナ（龍樹）について

ナーガールジュナの活動年代は150—250年頃と推定され、大乘仏教八宗の祖とも仰がれる人物である。密教（真言宗）の伝承では「龍猛」とも呼ばれる他、「ナーガールジュナ」という名の人物が複数名いたという説もある。ナーガールジュナの死後約100年後に書かれたという最古の伝記、鳩摩羅什訳『龍樹菩薩伝』によると、ナーガールジュナの出身地は「南天竺」（現在の中部〜南インド）で、バラモン（天竺）に生まれたとされている。彼はバラモンの学問を修めた後、この世の快樂を追求する生活を送ったが、最終的に欲望が苦しみと災いの根源であると悟った。その後、彼は近くの山の中のストウーパに詣で、出家受戒して仏教僧となったという。

その後、わずか90日の間にその地に伝わる経・律・論の三蔵を次々と読破し、その全ての内容を理解したという。彼はさらに他の経典を求めて「雪山」に到り、一人の老比丘から大乘仏典を授けられた。彼はそこで初めて大乘経典に接し、それを読んでその思想に強く惹かれた。その後、さらに諸国を遍歴してあらゆる仏典に通曉し、また様々な外道の論師たちと論争して彼らを全て打ち負かしたという。やがてナーガールジュ

ナは、大海の中の宮殿（龍宮）において、大龍（マハーナーガ）菩薩から七宝の箱に秘められた大乘経典、深奥なる秘典、また無量の妙法を授けるとそれを読み進め、最終的に「無生の二忍（人と諸存在は空であるという真理を確信し、安らぎを得ること）」の境地に至った。それを見届けた龍は彼を再び「南天竺」に送り還した。

その後はサータヴァーハナ朝王家の護衛隊の將軍となり活躍していたが、いつしか王の目に留まり一連の対論の後、王からの帰依と庇護を受けるようになった。ナーガールジュナの導きにより、宮殿にいた1万人のバラモンが全て髪を剃り、戒律を受けて仏教僧となったという。最期は、彼に敵対心を抱いていた上座部仏教の法師との問答の後、退いて静かな庵室に入り出て来なくなったという。彼の弟子が戸を破って中を確認すると、ナーガールジュナはすでに蟬の抜け殻のようになって死んでいたという。

ナーガールジュナは以上のような遍歴・求道・研究の中で、大乘仏教の創始と確立を決定的にする多数の論書や大乘経典の注釈を述作した。主な著作に、『中論』（サンスクリット語原典、チベット語訳、漢訳）、『六十頌如理論』（チベット語訳のみ）、『空七十論』（チベット語訳のみ）、『廻諍論』（サンスクリット語原典、チベット語訳、漢訳）、『広破論』（チベット語訳のみ）、『宝行王正論』（サンスクリット語原典「断片」、チベット語訳、漢訳）、『菩提資量論』（漢訳のみ）、『四讚』（サンスクリット語原典、チベット語訳）、『菩提心積』（サンスクリット語原典「断片」、チベット語訳、漢訳）、『十二門論』（漢訳のみ）、『方便心論』（漢訳のみ）、『大智度論』（『二万五千頌般若経』に対する注釈書、漢訳のみ）、『十住毘婆沙論』（『華嚴経』「十地品」に対する注釈書、

漢訳のみ)などがある。これらの著作のうち、ナーガールジュナの真作であることに疑いが持たれている作品もある。

ナーガールジュナはインドのみならず、中国・チベット・日本それぞれの仏教史においても重要な位置を占めている。彼の思想的影響は、「八宗の祖師」という呼称の通り、広汎で多岐にわたっている。インドに起源をもつ大乘仏教のアジアにおける展開史は、視点を変えれば龍樹思想の発展・展開史と捉えることも可能である。ナーガールジュナの著作と思想は、種々の国と地域に多大な思想的影響を及ぼして現代に至っている。

2. ナーガールジュナと天台宗（開祖…最澄）の関係

中国・天台宗の教義の根本は『妙法蓮華經』に依拠しているが、一方で、同宗はナーガールジュナに帰せられる『大智度論』の説を指南と仰ぎ、『涅槃經』を『法華經』の教義を補完する書物とし、『大品般若經』の所説を觀法（修行の方法）とするとも言われる。また他の經典や論書の説を引用することによって、信仰心を高め、仏教の教えに対する理解を深め実践することを勧める。

中国における同宗の開祖は智者大師・智顗（538—597年）であるが、その教義の系統は、彼以前（南北朝時代・北斉）に出た慧文に負うところが大きい。天台宗の初祖ともされる慧文は、『大智度論』および『中論』に依拠して、後に天台宗の根本教義となる「一心三觀」の説を立てた。「一心三觀」のうち「一心」とは一時に觀念することを意味し、「三觀」とは空觀・假觀・中觀のことを指す。従って「一心三觀」

とは、現象世界を否定的に捉える空觀、現象世界を肯定的に捉える假觀、この両者が揃って初めて真理が体得されるという中觀が心の中で同時に起こることという意味となる。

この「一心三觀」の教えは、慧文から慧思（天台宗第二祖）に授けられ、慧思から天台宗の開祖・智顗に伝授される。（龍樹を開祖とし、慧文を第二祖、慧思を第三祖、智顗を第四祖とする伝承もある。）智顗は慧思の下で法華三昧を修して開悟に至り、それまでの中国仏教を総合し天台教学を確立した。その後、天台宗の教えは、智顗（天台宗・宗祖）から章安（第二祖）、智威（第三祖）、恵威（第四祖）、玄朗（第五祖）、妙楽（第六祖）、道遂（第七祖）へと相承される。日本の最澄（767—822年）は唐に渡って道遂や行滿に師事し、帰国後は比叡山において天台宗を開宗した。以上より、ナーガールジュナの『大智度論』に説かれた思想が、天台宗の祖師たちによって脈々と受け継がれてきたことがわかる。

3. ナーガールジュナと真言宗（開祖…空海）の関係

空海（774—835年）による『秘密曼荼羅教付法伝』および『真言付法伝』によると、真言宗の起源として以下のような「南天鉄塔」にまつわる伝説が伝えられている。ブッダの滅後700年頃、龍猛（インド出身）という人物が南天竺（現在の南中部インド）にある鉄塔を開き、そこで金剛薩埵に会って秘密の真言の法門（『大日經』および『金剛頂經』）を授かった。その後、龍猛は真言の法門を広く伝えたという。金剛薩埵は、根本教主である大日如来からこの法を授かったとされる。龍猛はこれを弟子の龍智（イン

ド出身、インド名：Nagabodhi）に伝授した。それ以後真言の法脈は、善無畏（637—735年、東インド出身）、金剛智（669—741年、中インド出身）、一行（637—727年、中国出身）、不空三藏（705—774年、北インド出身）、恵果（746—806年、中国出身）へと伝えられる。804年、空海は正規の遣唐使の留学僧として唐に渡ったが、長安にいた恵果を訪ね、以後約半年間彼に師事した。恵果は空海を密教の奥義の継承者として認め、その奥義を余すところなく伝授した。

真言宗の伝承の系譜として、「付法の八祖」（教法の系譜）と「伝持の八祖」（真言宗を保持し伝えた祖師の系譜）の二種がある。これらはいずれも空海の『秘密曼荼羅付法伝』および『真言付法伝』に従ったものである。「付法の八祖」とは、大日如来（第一祖）、金剛薩埵（第二祖）、龍猛菩薩（第三祖）、龍智菩薩（第四祖）、金剛智（第五祖）、不空（第六祖）、恵果（第七祖）、空海（第八祖）を指し、「伝持の八祖」とは、龍猛（第一祖）、龍智（第二祖）、金剛智（第三祖）、善無畏（第四祖）、不空（第五祖）、一行（第六祖）、恵果（第七祖）、空海（第八祖）を指す。

『中論』等を著した中觀派のナーガールジュナ（龍樹）と密教の祖師としての龍猛が同一人物かどうかは不明であるが、真言宗の所依の經典で、空海の思想にも多大な影響を及ぼした『大日經』にもナーガールジュナの空の思想の影響が見られる。例えば、『大日經』に説かれる「空性の了知」（縁起・中道を了知することによって、断見と常見を離れることができる）、「本不生」（心および一切法は本来不生・不滅・不可得なものであるという思想）、「極無自性心」（真言門の菩薩の心は空性の了知により、究極の無自性心となる。無

自性心とは唯識説でいうところの三性に対する三無自性の心とも考えられる）などは、ナーガールジュナの空思想の発展形態と考えることも可能である。なお、善無畏（伝持第四祖）による『大日経疏』の漢訳（一行訳）には、『中論』『十二門論』『大智度論』等の所説が各所に引用されている。

4. ナーガールジュナと浄土宗（開祖…法然）の関係

鎌倉時代の凝然大徳（1240—1321年）による仏教教理の綱要書である『八宗綱要』によると、往生浄土の教えの源は、アシュヴァゴーシャ（馬鳴）作と伝えられる『大乘起信論』に端を発するとされる。同書の「修行信心分」という章の末尾には、仏の優れた方便としての「専修念仏」とそれによる極楽浄土への往生が説かれている。これを受けて、ナーガールジュナが『十住毘婆沙論』『易行品』において「難易二道」を説いたとする。

浄土宗の開祖・法然（1133—1212年）は『選釈本願念仏集』において、「正しく往生浄土を明らかにする教え」と「補完的に往生浄土を明らかにする教え」の二種があると述べている。正しく往生浄土を明らかにする経典（正依の経典）としては、『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』を挙げ、これらを「浄土の三部経」と呼んでいる。また、それらに世親の『浄土論（往生論）』を加えて、「三経一論」ともいう。一方、補完的に往生浄土を明らかにする経典・論書（傍依の経論）として、『華嚴経』『法華経』『随求陀羅尼経』『尊勝陀羅尼経』といった経典と『大乘起信論』『究竟一乘宝性論』『十住毘婆娑論』『摂大乘論』等の論書を挙げている。従って、法然はナーガールジュナに帰せ

られる『十住毘婆娑論』を「補完的に往生浄土を明らかにする教え」と見なしていることがわかる。

上述の通り、『十住毘婆娑論』第9章「易行品」の中に、「信方便」による「易行道」が説かれている。これは、信心を方便とする易行のことで阿弥陀仏をはじめとする諸仏・諸菩薩の名を聞き、それらの名を称することによって不退転の初地に到達することができる道のことという。法然は『選釈本願念仏集』の中で、曇鸞の『往生論註』を通じて『十住毘婆娑論』の趣意を引用しているが、その中で難行道と易行道の二つの道について紹介した後に、それらをそれぞれ、聖道門（自力の修行による道）と浄土門（信心を方便とする往生浄土の道）と同一のものであるとみなしている。難易二道の思想は、ナーガールジュナから曇鸞・法然を経て、親鸞へと受け継がれ、日本浄土教の根幹を成すものとなった。

5. ナーガールジュナと浄土真宗（開祖…親鸞）の関係

浄土真宗の開祖・親鸞（1173—1263年）は、ナーガールジュナを浄土真宗の「七祖（七高僧）」の一人として自著においてその功績を讃えている。七祖とは、ナーガールジュナ・ヴァスバンダウ（世親あるいは天親）（以上インド出身）・曇鸞・道綽・善導（以上中国出身）・源信・法然（以上日本出身）を指す。ナーガールジュナの著作の内、主に引用されるのは『十住毘婆娑論』である。例えば、親鸞による『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』）においては、同書の「入初地品」「地相品」「浄地品」「易行品」から文章を引用している。その『教行信証』の「行巻」の末尾に収められている偈文は「正信念仏偈」と呼ばれ、浄土

真宗の信徒が勤行等の場面で日常的に読誦する經典である。その中にナーガールジュナ（龍樹）を讃える箇所があるが、それは、以下の通り、『楞伽經』の一節を引用する形で始まる。

釈迦如来は、楞伽山において（『楞伽經』において？）人々のために宣言した。南方（中部）インドに龍樹大士が現れて、存在（有）と非存在（無）の二元的な見方をことごとく論破する。また彼は、この上ない大乘の教えを説き広め、歓喜の境地（初地）に到達して極楽浄土に往生するであろう、と。『教行信証』行巻（正信念仏偈）「Cf. 『入楞伽經』〔菩提流支訳〕大正 671, vol. 16, 569a22-27)

この一説はブッダがナーガールジュナの出現を予言するという形式を取っているが、実際には、『楞伽經』は一般に4—5世紀の成立とされているため、本来前後関係は、ナーガールジュナが登場した後『楞伽經』が成立するという順序となるはずである。このように時代的な前後関係は問題となるものの、少なくとも親鸞は『楞伽經』を知っており、その一節を借用してナーガールジュナの出自と功績を紹介したというのは事実であると思われる。思想としては、有と無の二元論的見方を離れること、つまり不二の思想あるいは空の思想を主張したと理解することができるだろう。

さらに、親鸞は『十住毘婆娑論』『易行品』に説かれる信心を方便とする易行道の教えを簡潔な形で提示する。内容的には、法然の理解と変わるところはない。

（ナーガールジュナは）ちようど陸路での旅が困難で苦しく水路での旅が安心で楽しいものであ

るように、(自力の修行は) 難行で (阿弥陀仏に
対する信心と称名念仏は) 易行であると示された。
また (ナーガールジュナは)、阿弥陀仏の本来の
願いを憶念すれば、自ずから即時に不退転の境地
(歓喜地) に至ることができると述べた。『教行信証』
に報いなければならない、と述べた。『行巻 (正信念仏偈)』より)

同様に、『高僧和讃』の中にも龍樹菩薩を顕彰する
首 (計 10 首) が見られる。それらは『楞伽經』『十
住毘婆沙論』『大智度論』を主な典拠としている。『大
智度論』については、引用・参照される箇所が一部に
限られており、内容的には「念仏三昧」の重要性和効
果を謳ったものが多い。なお、親鸞はナーガールジュ
ナの主著とされる『中論』には引用・言及することが
ない。

6. ナーガールジュナと日蓮宗 (開祖・日蓮) の関係

日蓮宗は『妙法華經』を殊のほか重んじるが、同
經が伝えられた系譜について、釈尊・智顗 (中国天台
宗の開祖) — 最澄 (日本天台宗の開祖) — 日蓮と次第
するものを「外相承」といい、日蓮自身を上行菩薩の化身である
として、釈尊—上行菩薩—日蓮と次第する系譜を「内
相承」(「本門相承」と称し後者を重んじる。上行菩
薩とは「優れた修行を行う菩薩」という意味で、『法
華經』「從地涌出品」に登場する。同章では、釈尊が
説法を終えると、大地の至るところが割れ、その割れ
目から夥しい数の菩薩たちが現れる様子が描かれる。

彼らは釈尊によって『法華經』の伝道にふさわしいも
のとして予言される。上行菩薩は、それらの菩薩の集
団を率いる 4 人の指導者のうちの一人である。

日本仏教の他の祖師と比較すると、日蓮 (1222
— 1282 年) がナーガールジュナの著作を引用・参
照することはそれほど多くないが、『大智度論』『中論』
『十住毘婆沙論』『菩提資量論』『菩提心釈』などへの
言及が見られる。日蓮は著作の中で、ナーガールジュ
ナを「龍樹」のみならず「龍猛」とも呼ぶものの、「龍勝」
と呼ぶ例はない。『十住毘婆沙論』に対しては、同書
の「易行品」が浄土教の念仏行の正当化に援用されて
いるため、否定的な態度を取る。しかしながら、以下
に見るように『大智度論』に対しては肯定的な見方を
している。

この龍樹菩薩は『大智度論』という文章におい
て、『華嚴經』『般若經』等は妙なる教えではなく、
『法華經』こそが妙なる教えであると述べている。
この『大智度論』とは、龍樹菩薩による論書で、
鳩摩羅什という人物が中国に伝えた。『大田殿女
房御返事』より)

日蓮は、大乘の經論の中でも『法華經』が「妙なる
教え」であると説く『大智度論』を高く評価している
ことがわかる。また実際に、『大智度論』には数ある
經典の中でも『法華經』からの引用が最も多く、著者
とされるナーガールジュナも『法華經』を重視してい
たことがわかる。なお、この『大田殿女房御返事』は「即
身成仏抄」とも別称されるが、大乘仏教で説かれる「即
身成仏」について論じた著作でもある。同書の中で日
蓮は、龍樹菩薩に関わる複数の論書を検討しつつ、最

終的には『大智度論』に依拠して『法華經』に見られ
る「即身成仏」の思想を説き明かしている。

一方、真言宗が所依の經典の一つとし、ナーガール
ジュナに帰せられる『菩提心釈』(漢訳は『菩提心離
相論』)にも「即身成仏」が説かれる。しかしながら、『菩
提心釈』では、二乗 (声聞・独覺) の修行者の即身成
仏は認めるものの、凡夫の身のままでの即身成仏は認
められていない。日蓮はこれに反対し、凡夫の即身成
仏も認める『法華經』の所説こそが正当なものである
と主張している。

7. ナーガールジュナと禅宗 (曹洞宗・臨済宗) の関係

中国禅宗の祖師・慧能 (638—713 年) による『六
祖壇經』や曹洞宗の開祖・道元 (1200—1253 年)
による『正法眼藏』(「仏祖」巻) には、「西天二十八
祖」というインドにおける禅宗の祖師の系譜が記され
ている。それらによると、第一祖から順に、1. 摩訶
迦葉大和尚、2. 阿難陀大和尚、3. 商那和修大和尚、4.
優婆塞多和和尚、5. 提多迦大和尚、6. 弥遮迦大和
尚、7. 婆須蜜多和和尚、8. 仏陀難提大和尚、9. 伏
駄蜜多和和尚、10. 波栗湿縛大和尚、11. 當那夜奢大和
尚、12. 馬鳴大和尚、13. 迦毘摩羅大和尚、14. 那伽闍
刺樹那大和尚 (龍樹、龍勝、龍猛とも呼ばれる)、15.
伽那提婆大和尚、16. 羅睺羅多和和尚、17. 僧伽難提大
和尚、18. 伽耶舍多和和尚、19. 鳩摩羅多和和尚、20.
闍夜多大和尚、21. 婆修盤頭大和尚、22. 摩拏羅多和
尚、23. 鶴勒那大和尚、24. 獅子大和尚、25. 婆舍斯多和
和尚、26. 不如蜜多和和尚、27. 般若多羅大和尚と続き、第
二十八祖が菩提達磨 (ボーディダルマ) 大和尚となる。
南インド出身とされるこのボーディダルマ (5—6 世

紀」という人物がインドから中国に禅の教えを伝えたとされる。中国での禅宗の法脈は、初祖をボーダイダルマとして、第二祖慧可、第三祖僧璨、第四祖道信、第五祖弘忍、第六祖慧能と続く。第五祖の弘忍の時、南北二宗（北〓漸悟、南〓頓悟）に分かれることとなった。臨済宗と曹洞宗は南宗の分派（五派）のうちの二つである。道元は、自著において

西天東土、出家在家の菩薩・祖師おほしといふとも、龍樹祖師におよばず。〔正法眼蔵〕「出家功德」より）

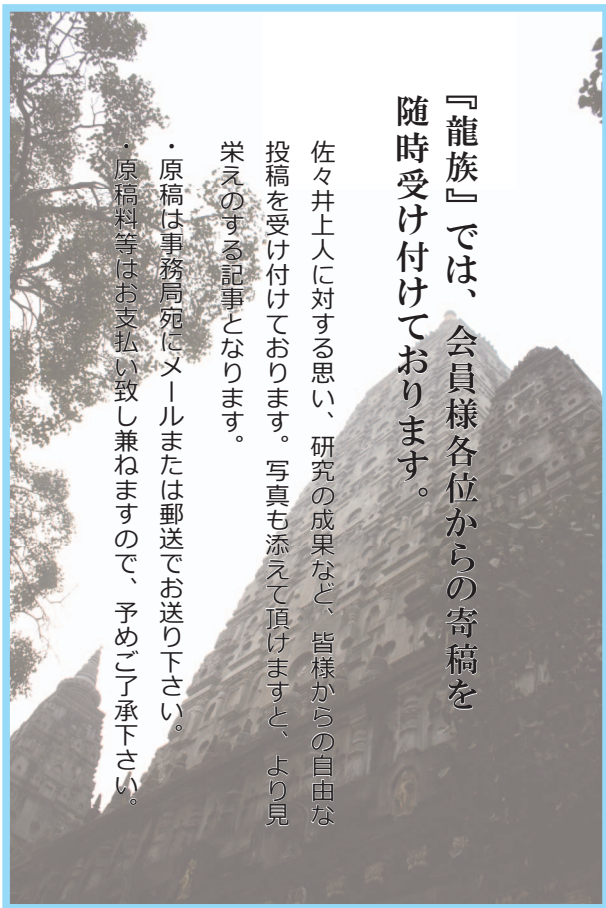
と述べており、多くの祖師の中でもとりわけナーガールジュナの功績を重要視している他、主著の『正法眼蔵』には『大智度論』からの引用が多数見られる。また道元は、比叡山・延暦寺で出家し天台教学を修めた後、1223年入宋して中国曹洞宗の禅師・天童如浄より印可を受けた。

なお栄西も、比叡山で出家し天台教学を学んだ後、入宋し、中国臨済宗黄龍派の虚庵懷徹の下で禅の修行を行った。帰国後は、日本において臨済宗を開き、『興禅護国論』を著した。『興禅護国論』にも、随所に『大智度論』の所説が引用されている。

『龍族』では、会員様各位からの寄稿を 随時受け付けております。

佐々井上人に対する思い、研究の成果など、皆様からの自由な投稿を受け付けております。写真も添えて頂けますと、より見栄えのする記事となります。

・原稿は事務局宛にメールまたは郵送でお送り下さい。
・原稿料等はお支払い致し兼ねますので、予めご了承下さい。



シルプルより。

インド・
シルプル在住
(3)
平野文興（大願龍興）

インド交通事情私感

インドの交通事情についてあくまでも私の感想とお断りした上でお伝えしましょう。

何度かインドに来られた方には特別な事ではないと思いますが、それでも日本のそれとは随分と違いがありますので、時には、そうそう、とうなずいて頂けるのではと思います。

私のいるお寺は、おいでになった方はお分かりでしょうが、村に入る直前、道路に竹にロープが付いた遮断器があります。何のためなのか分かりません。番屋があり、夜間は別として大抵門番のおじさんが椅子に座ってます。ここを通り抜けるとすぐ、「ここからが、嘗てあの玄奘三蔵法師も訪れていたシルプルですよ」という標識が立っています。

シルプルの村へ入った途端、右側に建っているのがこの村唯一の仏教寺です。バス停も寺の前です。というわけで、このお寺からシルプル地区が始まるのです。お寺は、インドで仏教を保護した王様のアショーカ王の名の付いたアショーカツ

リーに囲まれていますので、季節によっては40度を超える日中の暑さからバスを待つ人たちを護ってくれます。ここから、急に家並みが立ち並び、お店などが、ところどころにあります。

インドですから、まず目立つのが牛達です。野良犬も多く、猿もたくさんいます。真つ黒い顔をした尾っぽの長いハヌマーンラングーンという猿がお寺の庭のアショーカツリーを飛び回ったりしています。因みに数多いヒンドゥー教の神様にハヌマーンというお猿がいます。猿もインドでは神様になっています

でも主役は何と言ってもお牛さま。牛はヒンドゥー教の神様が乗る乗り物として崇められています。

寺の前が所謂メインストリートになるのですが、このメインストリートを、野良牛か、飼われている牛達なのか？見分けられませんが、白や、茶色の牛達、又、黒い水牛達の集団が、我が物顔で行き来しています。

インドで80%といわれるヒンドゥー教徒は牛肉を食べないとのことですが、インドにはイスラム教徒も多いですから全てではないでしょうが、彼らの食用としての牛なのかも？知れません。日本によく見るような黒と白のまだら模様のホルスタインは、見た事がありません。そのせいでしょうか、パック入りの牛乳の

味が日本のそれとは違って、いまいちコクを感じません。聞いたところによれば、どうも水牛のお乳らしいのです。

値段は 1 リットル 75 ルピーですから、1 ルピー 1.9 円として、約 150 円。因みに玉子も、一個 5 ～ 6 ルピーです。10 個買くと約 100 ～ 120 円となります。日本と変わらないのでは？と思います。しかも殻が薄く、割れやすく、また暑い陽射しの中で運ばれ売られているせいか、割った時の黄身の盛り上がりを感じません。日本で今いくらししているのか分かりませんが、物価が安いと言われるインドにしては、それ程安いとは思えません。

野菜類は安いと思いますが、同じ名前の野菜でも品種改良が進んでいないのか、あるいはこの今の味がインドの人達の好みなのか？日本の味に慣れた私には、イマイチな気がします。暑さのせいか、ナス、トマト、キュウリ、キャベツなど、皆皮が厚くて硬いのです。

また、買ったものの傷んでいるのがあったりするので、中には捨てるものもありますから、果たして日本で言われている程安いのかどうか？額面通りとはいかないのではないかと思ってます。

マイナスイメージが多くすみません。勿論プラスイメージも沢山あります。

話がずれました。その辺の事情は、ま

たの機会にしましょう。

その牛達ですが、時には数頭で、時には 100 ～ 150 頭を超える大集団で道路を歩いてますから、当然行き交う車は、出会えばスピードを落とさざるをえません。クラクションを鳴らし続けて牛達に道をあけてもらいます。

ま、彼らも慣れたもので、また車が来たわい、とばかりクラクションが鳴っているようが、おかまいなし。図体が大きいせいでしょう。動きがスローモーションです。車が近づいてきたなと思ってもゆつくりと、のんびりと、道を譲るといったありさまです。

ヤギも集団で移動している時に会いますが、彼らは臆病なのか、動きが素早く、すぐ道を開けてくれます。

牛達は時には、高速道路を歩いていたり、寝そべっていたりするので、油断なりません。実は私は夜、バイクで走っている時この牛とぶつかり合い、ちよつと間違えば大怪我をしたかもしれないこともありました。事情は長くなりますので、これも、いつか別の機会にしましょう。

牛って近くで見ると大きいので、怖い気がします。近づいてみるととても優しい目をしているのですが…。歩き方も、首を上下に振り、リズム感良くウンウンとうなずきながら歩いてます。でもその

点、水牛の方は図体が大きいし、黒いし、うなずき歩きではなく大きな月型のツノを槍の様に構えて顎を突き出し、突進するように歩いて来るので、集団で向かってくると怖くて迫力があり、近寄りがたいです。

ただ、かなわんと思うのは、かれらは公衆道徳を知らないのです。公道なのに平然と、脱糞、排尿をしていくのです。道路には常時、彼らの排泄したものがありますから、大便も小便もそれらを車がふみつけ、埃として舞い上がって、私達の鼻腔に入ってくるのであります。空気がそのものがいつも微かに臭うのです。「これぞ、インドの香り」と思えるかどうか？が前回のトイレ事情とともに、インドへ足を向かわせる一つの分かれ道かもしれません。

しかも、彼らが立ち止まってやってくれば、それなりに、それらをまとめて燃料として拾って行ってくれる人たちもいて生活に役立っているのです。でも歩きながらやられると散らばるので拾えないのです。

また、うっかり珍しげに一緒に歩いていたりすると、何の前触れもなくいきなり落したり流したりするので、注意しなければならぬのです。実際の被害者の一人です。

農村地域ですから、農業用車両が多く、

トラクターが荷台を引っ張って、工事の砂や作業員を何処かへ運んだり、スクールバスとして子供達を荷台に満載して学校へ運んだりしてます。

そのトラクターのエンジン音がまた凄いです。ガソリンエンジンやディーゼルエンジンではありません。昔懐かしい焼玉エンジンと言うのでしょうか？バーン、バーン、バン、バン、バーン、バン、……といった。物凄い音を鳴り響かせて走ってます。

この様な日常風景が見られるので、ここシルプルでは、幼かった頃の日本の時代にタイムスリップしたようです。私の年齢も戻ってくれば良いと思うのですが……(ー、ー)

さて、市街地域の交通事情です。

ここシルプルは都会から離れた寒村なので、この小さな村の交通事情を伝えてもインド全体としての話にはなりませんので、ここから車で約 2.5 時間、空港のある街ライプルまで時々行きますので、この比較的大きな街の交通事情をお伝えすることで、インドの交通事情として興味深い事をお伝えできると思います。もちろん、交通ルールはあり、日本と同じ左側通行です。

が……。そのはずなんです、このルールがあつてないようなもの。なのです。ハッキリ言って、メチャクチャクチャで

す。

最近、道路の整備が急速に進められていて、このチャッティスガル州は近年（2000年11月）に、州として分離した事もあるでしょう。インド全体のインフラ整備の一環としてあるのかもしれませんが、新しく出来た道路は日本の高速道路のようで、片側3車線の広い快適なものです。

こういう所をバイクで風を切って走るのは実に快適で、日本とは違い、一年中バイクシーズンと言っても良いかもしれません。

しかし、この快適道路が市街地に入っていくと、我々の感覚からするととんでもない状況に急変します。

当然交差点が増えるので、混雑してきます。

一応、と言っておきます、一応信号はありますが、それが青だと思って安心して走って行つてはいけません。交差点に差しかかるまえから警笛を鳴らし、スピードを落として左右確認して通らないと危険です。前方を横切る車両はたとえ赤になつていても、大丈夫だと思えば横切っていきますから。それかなりぎりぎりまで横切っていきます。相手も、こちらが速度を緩めるのが当然だ、と言わんばかりです。ですからこちらが青だといえ、必ずしも安全に通行可能ではないのです。

交差点に警察官がいても、お構い無しです。その警察官は、信号無視を咎めるのではなく、事故が起きないように交通整理をしているのだと思われます。

朝夕のラッシュ時などは大騒ぎです。交差点はいつも、ギャーピー、ギャーピー、オーケストラの不協和音の大演奏会場となります。我先にと争うのでうるさいのなんの！

この、ギャーピーですが、日本人の鳴らす警笛の感覚とは少し違う気がします。常に鳴らして、こちらの存在を、知らしめている。といった感じです。事実、トラックの後ろには、必ずと言って良いほど「警笛ならせ（ホーンブロー）」と大きく書かれています。

思えば、道路を利用しているのは、人間ばかりではないのです。牛様もご利用なさっているのですから、我々も彼らとともにあらねばなりません。彼等にもこちらの存在を知らせねばならないのです。市街地の混雑している道路であれ、スピードを出して走っている快適道路であれ、彼ら牛様達は、我々人間の都合など知ったことではありません。堂々と道路を横切ったり、混雑道路の横に寝そべっていますから、混雑を増長します。

「ワシらは、ずっと前からこの辺りに住んでいたんだモンネー。あんたらワシらの居場所を邪魔せんといてモウー！」

とばかりです。

この排気ガスの充満している道路であるように集団で、あるいは2〜3頭で我慢しながら横たわっているのは、彼らは「人間は我らの場所を奪うな！」とでも看板を立てて、あるいは集団でデモ行進をして抗議しているようにも見えます。

私の牛との事故も、彼らの勇気ある一頭が、我を顧みず抗議をしてきたのかも知れません。衝突した時、彼は右顔面を強力な衝撃力で傷を負ったと思われます。目をやられてなければ良いがと思っていますが……。私が道路に倒れ、彼を振り返ってみた時、彼がこちらをジッと見ていました。あの時の顔が今も 思い出されます。

車は、トラックを多く見ます。大変多いです。それも運転席が高い大きなトラックで、殆ど片側に2輪ずつの10輪、16輪、20輪などが、埃をまき散らしガンガン走っています。インフラ整備を進めているためでしょう、インドのエネルギーを感じます。

でも、車そのものはかなり古さを感じさせます。タイヤもすり減っているトラックが多く、パンクをしたのでしょうか。道端でタイヤ交換をしているのをよく見かけます。

バスも同じで、古く、キズだらけ。この暑い国で、しかも公共のバスにエアコ

ンがないのは理解しがたいです。

12月の寒い頃ネパールに行った時などは、暖房がなく、とても寒くて、窓も車が揺れるごとに開いてしまうので、手で押さえてなければならなかった事もありました。いわゆる新興国の交通事情は、日本のそれとは随分違い、人も荷物とおなじく、単に運搬する対象物なのだと知らされます。そのせいか運転は荒っぽく、彼の自家用車、とても思っているのではないだろうか？スピードを楽しんでいるかの様な怖さを感じます。

ベトナムの殺人的な混雑にはかないませんが、バイクが圧倒的に多いです。

バイクは120〜150CCが主流で、多くは二人で乗っていて、時には三人、四人、あるいは子供をガソリタンクに座らせ、もう一人の子供は後ろで運転手のお父さんに抱きつき、その後ろにお母さんがひとりはおんぶしてもうひとりは抱っこして五人乗り、更にペットの犬も乗せ、6人乗り？というバイクも走っています。

もし事故でも起きたら、真っ先に幼い子供が犠牲になると思います。

そのタンクの上の子供も、埃の多い道を、先頭で目をシバつかせながら、よく我慢して乗っているなあと感じます。バイクは家族にとつてのファミリーカーなのかも知れません。

タクシーは、ご存知のようにオートリクシャーといわれる三輪車です（因みにリクシャーという言い方は、日本の人力車が基になっているようです）。

250CC位のオートバイを三輪車にして、それに荷台と屋根を付けたといった感じのもので、定員は一人から、乗れるだけ何人でも。という庶民の足として利用されています。すし詰め状態で走っているのをよく見かけます。10人以上のものもあります。

雨が降ってくると大変です。ドアがないので、濡れるまま我慢しながら乗ってなければなりません。

オートリクシャーではなく、サイクルリクシャーそのものも健在で、自転車三輪車にして荷台をつけ、人力パワーで人や荷物を運んでくれます。でも定員はせいぜい四人まででしょう。その出力にもよるでしょうが……。私も利用したことがあります。一所懸命ペダルを踏んでいるのを見て、なんだか申し訳ない様な気分になってきて、それ以来利用していません。

自転車も多く走っていますが、これが夜になると怖い存在になってくるのです。「明けは良い、良い、暗くは怖い」です。自転車にはライトが付いていないのです。つけると持つて行かれてしまうのですし、

うか？ライトの付いている自転車は見た事ありません。せめて反射板がついていればいいのに、と思うのですが……。

市街地を離れば、夜は道路には街灯がありませんから、対向車のライトに気を取られていると、突然暗闇の中から、自転車や人が目前に現れてくるのです。しかも、対向してくる車の多くが、何故かライトを上向きにして走っているのです。私はメガネをかけているので、眩しくて全く前が見えなくなる時があります。道路に突然地面から湧いたように、まさしく幽霊のように突然、ふあーと現れるのです。怖いです。危険極まります。

さらにさらに、道路には所々、車のスピードを抑えさせるためでしょう、小山が設置されていて、これに気づかずそのまま走っていると、車にドンと大きな衝撃が来ます。時には二列、三列も小山があります。ドン、ドン、ドンとバウンドします。バイクもうっかりしているとハンドルを取られます。夜などは特に見落としてします。怖いです。危険極まります。今だになぜ、こんな危険な物を設置しているのでしょうか？しかもその度にブレーキをかけざるを得ませんから、燃料の消費が増えます。どうしてわざわざ設置しているのか分かりません。行政の取り換え！の一言で、車の燃費も向上するだろうし、積んでいる荷物の損傷も、車の痛みも違ってくるのだらうに。と思う

のは、私だけではないでしょう。それとも、そのまましておかねばならないほど、何かの事情があるのでしようか？インドの不思議の一つです。

ま、考えようによっては、物事は不思議だからこそ、解らないからこそ、そこに魅力を感じるのかもしれない。

なんだかわからないことが多いのがインドで、私はその度に
[This is the INDIA!!] (〇)
と叫んで自分を納得させています。

お伝えしたい事はその他たくさんありますが、今回はこの辺で閉じさせていただきます。

マンセル・ブツダガヤ 両塔礼拝

佐伯隆快

南天会会員で岡山県久米郡美咲町華蔵寺住職の阿形国明師が企画された「仏様に出逢う旅」に参加しました。僧俗合わせて3コース30名が参加して移動と行事を繰り返す前代未聞のツアーとなりました。行程順にレポートしてみたいと思います。



2月4日、節分の翌日逃げるように日本を出発するのは毎年のことながら、今回は主催者ではないという心の余裕がありがたかった（この時期のナグプール訪問は、チャティスガル州ドンガルカルで行われる国際仏教徒大会への参列という佐々井上人の希望を受けて、去年まで3年連続で自分が主催者となり参拝団を組んでいました）。

関西国際空港に到着すると、それらしきお坊さんが声をかけてきた。全日程で同室となった岡山吉永町の内海さんであ

る。また南天会からの参加者、土岐信子さんも合流。そして団長の阿形さんと若手僧侶の皆さんが、たくさんのお梱包荷物と長大な箱を携えて登場。なんと両界曼茶羅の掛け軸を持って行くと言う。荷物を分配してチェックインを済ませ、いざデリーへ。

エアインディアは、エコノミーでもここもシートが広い気がする。香港経由でインド時間午後 10 時デリー到着。入国審査が遅々として進まず、ホテルに到着したときには 12 時を過ぎていた。現地ガイドのシャルマさんが明日(今日)の予定を発表、3 時起床 4 時出発、なんだそりゃ? しかも C コースの人は今デリーに着いていて、これからシャルマさんが迎えに行くという(私は B コースで参加。B、C、E コースがあり A と D は募集の過程で消滅)。インドは大体こういうところだというのが……。

2 月 5 日、C コースの人々が合流して 21 人となり早朝便でライプルーへ。ライプルー空港には、佐々井上人自らお出迎え。ナーランダ大学の中村龍海さん、滞在支援隊の姫野さんもいる。一同バスに乗り込んで、仏旗はためくバンテージ号を追いかけてルート 6 を東へ、シルプールを目指す。道路が良くてなかなか早い。マハーナディ河を越えると左に曲がりシルプール専用道路へ。チャティス

ガル州が世界遺産登録を目指す大遺跡シルプール到着。遺跡の入り口に建つシュレーイ・ササイ・ブッダ・ビハールにて、お茶をいただきお勤めをした。ここに「シルプルより」を寄稿されている平野文興さんが止住しているが、このときは一時帰国中。

シルプールは広い。中村龍海さんの説明で、佐々井上人発見のお寺や巨大な市場の跡、王宮跡などを歩いて見学。玄奘三蔵が訪れたダクシナーコーサラ国の都城といわれ、またパインドゥ王朝後期の都、ティールヴァデーバ大王が建設した密教都市などと期待は遠大だが、現地はいたつてのどかな村である。この日のホテルは、チャティスガル州がシルプールへの観光客を見込んで建てた招待所。「なに分まだ接客に馴れていないもので……」を合言葉に、食事の準備や部屋の準備が遅れ気味。しかし新しく割ときれない部屋で静かな田舎の夜を過ごす。

2 月 6 日、この日のことを私は「ドンガルカルしぼり」と言う。国際仏教徒大会の開催がこの日と決まっているために、この日を中心に日程を組まなくてはならないからだ。朝 6 時半出発。途中バスの中で 10 年前に佐々井上人が特集された「世界ふしぎ発見」の DVD を上映。あらためてバンテージの偉業を認識してもらう。4 時間余りでドンガルカル到着。

黄金の大仏が輝くプラジュニヤ山の麓の平原に主催者発表 3 万人の仏教徒が集結する。市内から会場まで 3 キロのパレードに、佐々井上人も途中まで歩いて参加された。ダンマセーナ(法兵軍)の隊列と共に、老若男女が同じ方向を向いてサイ・バンテに従って歩く。鼓笛隊や剣舞など織り交ぜながら、なかなかの早足で進む。

山上の大仏様にお参りし、下りてくると大天幕の会場にひな壇が設えられ、佐々井上人を中心に日本人参拝団もゲスト席に座る。ここから夕方の 5 時過ぎまで、スピーチや踊りが延々と繰り広げられた。歌や踊りはブッダ、アンベードカル博士を称える内容で、いわれなき差別を受けるダリットの悲哀を演じる歌もあった。

我が滞在支援隊の姫野さんはバンテージの言いつけで、「上を向いて歩こう」とマラーティ語の歌を熱唱した。これがなかなか上手い! 霧にかすむ大平原に姫野さんの歌声が響き渡った。土岐さんは詩吟を披露された。

しかし毎度ながら意味の解らないスピーチを何時間も聞き続けるのは大変である。今回は高齢の方も参加されているので、阿形さんも気が気ではない。夕日が差し始めた午後 5 時に遅れて登場の州の文化大臣のスピーチがはじまる前、あと 10 分で終わるから待てという司会者

のマイクを奪い、強引ながらも日本人全員でお礼の言葉を述べ、代表の阿形さんと私を残して、皆さんは会場を後にした。この後、割れたガラスの上で女性が踊るなど不思議な演目などがあり実際には 1 時間後に散会となった。

一路ナグプールへ。夜のルート 6 を西へひた走る。先発した皆さんは途中で料金所渋滞に突入し、ハイウェイ逆走という恐怖を味わったそうである。午後 11 時、仏都ナグプールに到着。トラベルサライの石田さん曰く、「もつともハードな一日が終わった。」(しかしその認識は甘かった?)

2 月 7 日、E グループ 9 名の人々が深夜デリー着 2 時間仮眠 4 時出発の C コースと同じ行程でナグプールに到着。全コース 30 名うち揃い、マンセル南天鉄塔へ。この度の二大行事の一つ、懺悔百礼庭讃真言念誦行の法要を修行した。

バスの中で参加者一人一人に坐布とサポーターの入った袋が配られた。麓の文殊師利菩薩大寺で衣帯を整え、ほら貝を鳴らしてマンセルの丘へ登る。今回はバンテージも同行された。複雑な石組みを見ながら頂上に至り、中心に壇を設えた。導師は高野山親王院安田弘明師。親王院は 1200 年前インドを目指しながらマレーシアで薨去された真如法親王のお寺である。E コースで来た阿形師の弟



の宗治さんが持参した六尺の角塔婆を開眼し、龍樹菩薩増進仏果を祈る。

僧俗共に南天鉄塔の中心に向かい、一礼、一礼、懺悔文を唱えながら五体投地する。弘法大師の付法伝によると、龍猛菩薩鉄塔開扉の折、金剛神に遮られた龍猛菩薩は至心に懺悔して塔中に入ったという。「皆さんそれぞれ何か一つ懺悔することを決めて、一心に礼拝してほしい。」と阿形さん。

我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋痴
従身語意之所生 一切我今皆懺悔
皆さんそれぞれ何を懺悔されたか、空は高く地平は開け穏やかな風そよぐマンセルの丘は、なんとも心地よい場所であった。

庭讃、真言念誦滞りなく終了し、法要

後、南天鉄塔の説明をした私は、バンテージに「鉄塔は開いたでしょうか？」と聞いてみた。「開いたと思います。」とバンテージ。ありがたや龍樹菩薩の故地に参拝し、ここまでのことが出来るとは。

我々の目的は一つ成就したのであった。ビハラサイトを見学し、龍樹菩薩大寺で昼食をいただいて市内にもどり、佐々井上人の住坊インドラ・ブッダ・ビハラへ。昨年完成した女子寮でEコースの人を中心に御詠歌が披露され、女の子たちはお返しにと三帰戒の歌を歌ってくれた。

デイクシヤ・ブーミは車窓から遙拝し、Dr. ババサーへブ・アンベードカル国際空港へ。飛行機のチケットの関係でC、Eコースの人はデリーへ帰り、明日

またブッダガヤで合流する。実にEコースの人は日帰りナグプールという強行軍であった。

2月8日、Bコースの我々は、バンテージと一緒に一旦デリーへ。デ

リー空港の待ち合わせ時間に、参加者の宇喜多さんがバンテージの前に正座して教えを乞うた。「宇喜多といえば私の主君筋にあたります。」と宇喜多直家、秀家の話。そういえば、福山から参加の笹井さん。群馬から長柄（ナガラ）さん。位田さんの俗名が龍樹という、などと因縁浅からぬ人々が参加していた。阿形さんの狙いや如何？

夕方4時過ぎにブッダガヤ到着。しかしC、Eコースの方々の飛行機が遅れに遅れ、この日予定のスジャータ村でのお速夜法要は夜8時を過ぎてからの開始となった。スジャータ村のストウパー前で一人一人に配られた灯籠に火を灯し、御詠歌や和讃、中島みゆきの「糸」などを歌い、静かに祈る。その後、灯籠を持って大菩提寺まで行列し、大塔前にてEコースの古賀さんが明日の土砂加持法要のための祭文を読み上げた。このとき阿形さん、バンテージ、石田さん、なぜか鬼気迫るものが……。移動の疲れもあり、ブッダガヤの町の不穏な空気が、大塔上空に渦巻いて見えた（のは私だけか？）。

2月9日、朝4時起床。朝食をとり荷物をもとめバスに乗り込み大菩提寺へ。6時からいよいよ今回のメインとなる土砂加持法要を修行する。実はこの法要は事前に申し込んでいたにもかかわらず、

昨日大菩提寺管理委員会にあいさつに行った阿形さんに無情にも「そんな法要は認められない。」との通告があり、困った阿形さんはバンテージに相談、再び管理委員会に行き、自らも管理委員の一人である佐々井上人の一言により、午前

6時から9時の3時間、金剛宝座北側の一面を開放してくれることになったのだ。宝座を囲む欄楯に両界曼荼羅を掲げ、尼連禪河の砂を並べて密壇が荘厳された。導師は団長の阿形師。私は胎藏曼荼羅の前に坐して念誦する。金剛界側には、移動を促されても動じずに座り続ける女の人。職衆が禪河の砂を加持して法要が始まった。土砂加持次第にしたがって声明の声が響き、お経を唱えながら大塔を巡る。佐々井上人も回廊の縁に座り一部始終を見守っておられた。

法要を終えて、参加者それぞれ感慨は様ではないと思うが、個人の思いを超えて大塔はそびえ立つ。バンテージの「やりましたな！」の一言が何よりうれしかった。

この後もツアーはそれぞれのコースで続き、バラナシ、サルナート、アグラなどを巡り帰国した。尼連禪河の砂を南天会会員の皆様にと阿形さんから預かっているの、同封いたします。

南天会会計報告(H27. 11. 18~H28. 3. 15)

月	日	摘要	収入金額	支出金額	差引残高
11	18	前期繰越			203,534
11	24	振替用紙印字代 (500 枚)		602	202,932
11	30	会費 (振込)	25,000		227,932
12	1	一時帰国写真印刷代・インド送代 (中村龍海)		77,854	150,078
12	4	龍族 5 号作製費		22,400	127,678
12	7	龍族 5 号送費		18,960	108,718
12	19	交流会会場お礼 (真成院)		10,000	98,718
12	19	滞在支援カンパ	30,000		128,718
12	19	会費 (現金)	10,000		138,718
12	30	滞在支援カンパ (振込)	285,500		424,218
12	30	会費 (振込)	90,000		514,218
1	30	滞在支援カンパ (振込)	45,500		559,718
1	30	会費 (振込)	10,000		569,718
2	3	滞在支援カンパ (振込)	100,000		669,718
2	3	第 2 次滞在支援隊渡航費援助 (1 名)		150,000	519,718
2	11	会費 (現金)	15,000		534,718
2	12	本売上	5,000		539,718
2	18	第 1 次滞在支援隊渡航費援助 (2 名)		349,580	190,138
2	29	第 3 次滞在支援隊渡航費援助 (1 名)		100,000	90,138
2	30	会費 (振込)	5,000		95,138
3	15	収支合計	621,000	729,396	95,138

(単位 円)

滞在支援カンパ合計 : 461,000 円

滞在支援隊渡航費援助合計 : 599,580 円

※第 3 次滞在支援隊は、第 2 次の手塚直人さんの後、南天会世話人の小林三旅さんが滞在予定です。

※渡航費援助の内容は、日本～インド航空券、海外旅行保険料、ビザ申請代等の必要経費で、現地の滞在費用は各自の出費となります。

《 滞在支援カンパ協力者御芳名 》 ※敬称略 五十音順

朝倉誠 石村庄右 市橋美緒奈 岩佐澄隆 漆間宣隆 江幡誠 岡本佳子 亀田しのぶ 川村美知枝 黒澤雄太 河野太通 小山美津江 佐々木なおみ 宍戸末美 志村智子 関口英弥 関口昌子 関口雄太 関戸咲子 高山龍智 田口裕視 武田英敬 武山博子 田中徳雲 遠山陸子 長坂公一 長瀬拓磨 藤原博元 宮淵泰存 森下正志 山口眞一 山本昌子 米盛輝雄

佐々井上人用 iPad、インターネット通信機器は、滞在支援隊を企画された大谷様、山本様より佐々井上人に寄贈されました。

また、奥平心月さんより切手 関口昌子さん、山田尚子さんより交流会お茶菓子を頂戴しております。

その他、世話人賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

◆南天会現況(平成二十八年三月三十一日現在)

正式会員数 131名

賛同人(五十音順・敬称略)

岩佐澄隆(仏国土をつくろう会会長)

漆間宣隆(浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長)

奥平心月(釣月庵庵主)

織田隆深(高野山真言宗真成院住職・密門会会長)

黒澤雄太(剣士・日本武徳院師範)

小池一郎(株式会社マクシス・シンター常務取締役)

島影 透(株式会社サンガ社長)

高山龍智(佐々井上人お弟子)

土屋信裕(顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰)

富士玄峰(臨済宗・元ナグプール同友会世話人)

宮淵泰存(日蓮宗妙光寺住職・長野県修法師会会長)

宮本光研(真言宗御室派元執行)

宮本龍勝(佐々井上人お弟子)

山本宗補(フォトジャーナリスト)

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人と

し、お名前を公表させて頂いております。

賛同頂ける方は是非お申し出ください。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人と

し、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽

にご参加ください。



ご支援・ご入会について

◆ナグプール滞在支援◆

南天会では、一定期間ナグプールに滞在して直接佐々井上人のお手伝いや健康管理ができる日本人スタッフの派遣を実施しております。

巻頭記事にありますように、記念すべき第一次支援隊は無事任務を果たし帰還しました。一時健康を危ぶまれた佐々井上人も、いつもの調子を取り戻しつつあります。信頼できるスタッフのきめ細かいケアが常に受けられ、何より好きな日本食を取れるというのが力になっているのかもしれない。

続いて現在、第二次支援隊がナグプール入りしています。入れ替わりで第三次支援隊の派遣も決定しております。

このような積極的な支援が実現できますのも、南天会会員の皆様が佐々井上人に対する熱い思いを寄せて下さるお陰です。ご協力下さいました皆様お一人一人に感謝致します。

今後も継続して支援を続けていきますよう、より一層のご協力を賜りたいと思います。何卒宜しくお願い致します。

・渡航費カンパのご協力⇨同封の振込用紙にて

下記口座にお振込下さい。次なる要員を送り出し、支援を継続するためにご協力をお願い致します。

・滞在支援要員募集⇨日本食の調理など健康

面の補助、また日本との連絡を密にすることが主な任務となります。滞在期間は1〜3ヶ月程度。南天会からは往復渡航費、保

険、ビザ申請などの経費が援助されます。現地での滞在費用は自費となります。詳しくは南天会事務局までご連絡下さい。

◆その他ご支援(特別支援)◆

時期、金額を問わず随時お受け致しております。

《南天会ご入会をご希望の場合》

振込用紙に「住所・氏名・連絡先電話番号(メールアドレス)」、通信欄に「会員種類(支援、一般、学生)」をご明記の上、会費を送金ください。会費納入後、確認書類を封書にてお送りいたします。

※領収証が必要な方は、通信欄にその由ご記入ください。

【会員種類と年会費】

支援会員 10,000円以上/年
一般会員 5,000円以上/年
学生会員 2,000円以上/年

(※大学生まで)

《各種お振込先》

【金融機関名】 ゆうちょ銀行

【加入者名】 南天会

【口座番号】 01380-0-90164

同封の振込用紙、または郵便局備え付けの払込取扱票にてお振込下さい。

※ご入会を希望せずご支援のみの方は、通信欄に「入会不要」とご記入下さい。

6月、佐々井上人一時帰国！

佐々井秀嶺上人は今年も6月を中心に一時帰国される予定です。
滞在中の予定など、会員の方には後日ご案内いたします。

第6回 南天会交流会

日程… 4月23日(土) 午後2時～午後5時

場所… 神戸JBクラブ(神戸青年仏教徒会)

神戸市中央区楠町5-4-16-102号

(ワコーレ大倉山フラッツ1階)

アクセス… ◆JR神戸駅下車徒歩10分

◆新幹線新神戸駅から市営地下鉄西神中央行き、

大倉山下車、徒歩5分

◆阪急、阪神神戸下車徒歩7分

内容… 富士玄峰師のお話

・座談会

・事務連絡

・佐々井上人一時帰国について

参加費… 無料

第7回 南天会交流会

日程… 6月5日(日) 午後2時～午後5時

場所… 真成院

東京都新宿区若葉2-7-8

電話 03-3351-7281

アクセス… 東京メトロ四谷三丁目駅、

またはJR四谷駅下車、徒歩7分

駐車場には限りがございます。近辺の有料駐車場を

ご利用ください。

内容… 佐々井上人を囲んで座談会を行います。

参加費… 無料

◆同封別紙イベントのご案内

4月17日(日)

アンベードカル博士生誕125周年記念日

主催… BAI AE Japan

日程… 4月17日(日) 午後1時半より午後6時半まで

場所… 中新田コミュニティセンター

海老名市中新田2-16-14

電話 046-231-7438

125TH DR. BABASAHEB AMBEDKAR BIRTH ANNIVERSARY

Sunday, April 17, 2016

Headquarters Community Center
Room No. 1
2-16-14 Nakatsuta, Shinjuku-ku,
Kanagawa Prefecture
940-0422, Japan
Tel: 046-231-7438
Time: 13:30 to 18:00

Contact:
Sachin Wasthede
090-9509-3687
sachin.wasthede@baiae.org

125 years ago on 14th April, 1891, the great man was born in India in a poor village in Maharashtra. He studied & achieved great things through social discrimination. He went on to become one of the most highly educated & enlightened leaders of India.

He is the Father of Indian Constitution & first Law Minister of Independent India. He was awarded India's highest civilian honor "Bharat Ratna" in year 1956.

Let's come together to celebrate 125th anniversary of Dr. Babasaheb Ambedkar & to remember his great thoughts.

See the detailed schedule & map to the venue on following pages.

10月9日～15日
ナグプール・ムンバイの旅7日間
大改宗式60周年記念に参列する南天会のツアーです。
添乗員として、南天会会員クマール・ソヌさんが同行します。

日程	場所	交通機関	時刻	日程	食事
10/9日	海田 デリー	A 1307	1115 1700	成田後 デリー-真成寺から	昼× 夜× 夕焼内
10/10日	デリー ナグプール	A 1409	0545 0725	早朝国内線でナグプールへ 到着後ホテル宿泊。ディナッシュ・ブーミへ 訪問。真成寺大参拝。ナグプールを訪問	昼× 夜× 夕焼内
10/11日	ナグプール	専用車	0800 1900	大改宗式60周年記念式典参拝 午後はナグプール博物館、市内観光	昼× 夜× 夕焼内
10/12日	ナグプール ムンバイ	飛行機	0800 1700 1845 2000	インドラキ(佐々井上人参拝) 参拝 マンセル・アタシ、真成寺 真成寺大参拝 ホテルでムンバイへ ムンバイ到着後ホテルへ	昼× 夜× 夕焼内
10/13日	ムンバイ	専用車	0800 1900	真成寺ムンバイ参拝。 真成寺博物館、インド門、 ファミリーパークでエレン・ファンタジー 真成寺エレン・ファンタジー参拝	昼× 夜× 夕焼内
10/14日	ムンバイ デリー	飛行機	0800 1700 1915 2115	真成寺ムンバイ参拝 ムンバイ出発 デリー-到着後真成寺に参拝 デリー-真成寺	昼× 夜× 夕焼内
10/15日	成田	A 1306	0845	成田後	昼× 夜× 夕焼内

※時間は予告なしに変更する場合がございます。

(南天会事務局)

〒710-0004

岡山県倉敷市西坂 1582-1 一心念誦堂内

TEL/FAX 086-463-9391

佐伯隆快 (090-5304-8955)

小林三旅 (090-4538-2677)

メール nantenkai@gmail.com

URL <http://www.nantenkai.org/>

最新情報は
Facebook『佐々井秀嶺資料室』
をご確認ください。



南天会のご周知・ご吹聴にご協力ください

お陰様で入会者数は増えてきておりますが、支援の輪は
まだまだ広がっていかねばなりません。パンフレットな
ど必要な方は事務局までお知らせ下さい。PDF版は南
天会ホームページ「南天会について」よりダウンロード
できますので、各自印刷の上ご利用下さい。